



1986年(昭和61年)
11月号(No. 497)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

国際アルピニスト・シンポジウム	
松本 信濃支部	(1)
海外の山	(3)
「記録主義の時代の終焉」	
「ブロード・ピークとK2の登頂、そしてK2での悲劇」	
山岳会よりお礼状」他1	
時ならぬ富士の雪	
安藤忠夫	(3)
「木暮文庫」始末記	(5)
東西南北	(6)
「第十回丹水会の記」「三水会現地集会」「山岳博物館を考える会」他	
図書紹介	(6)
「山の本三冊」「高みをめざして」	
報告	(8)
北海道支部、岩手支部、婦人懇談会	
会務報告・ルーム日誌・会員移動	(9)
図書受入報告	(10)
お知らせ	(11)
「忘年会」「訪ボ・訪ニ隊員募集」	

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

国際アルピニスト・

シンポジウム松本

信濃支部

シンポジウム開催に先きだち、八月十日(日)、松本東急インで、E・ヒラリー卿による特別講演会「私とヒマラヤ」が開かれた。

吉沢一郎名誉会員が英語で卿の経歴、業績を紹介、中村テル名誉会員が通訳を務められ、「感激のエベレスト初登頂」が再現された。卿はスライドを使って、ネパール奥地に学校や病院を建設するなど現地住民のための活動を紹介。「これらが一番価値ある仕事だ」と語っている」と語った。一時間にわたった講演は、にじみ出るその人柄の故か、品のある格調高いもので、松本市民に多大な感銘をあたえた。

本番の国際アルピニスト・シンポジウムは、八月二十日(水)から三日間にわたって松本市音楽文化ホールで開かれた。

海外から八ヶ国十五人、国内九人の講師が招かれ、「山と人間」をメイン・テーマに、高所医学、登山教育、自然保護と様々な角度から、その関わり合いを掘り下げようというものであった。

ホルン演奏で幕あけした開会式に続いて、今西寿雄本会会長による特別講演「日本の登山史とマナスル登頂30周年」のテーマで、今日までの日本登山界の歴史と現状を述べたあと、「登山は安全に登ることが何事にもまして大切である」と結んだ。

続いて、史占春中国登山協会主席は「中国登山30年の歴史」を語り、国際的な交流に力点を置いて

た。

登山運動に貢献したいと強調した。

基調講演としてニュージーランド山岳会ノーマン・ハーディ元会長が「世界の自然保護活動について」のなかで、一九五五年のキャン



「国際アルピニスト・シンポジウム松本」開会式

「山を愛する心で自然も」と報告した。

第二日目の二十一日は、高所順応に関する権威者で

チャールス・ハウストン名誉教授による特別講演「山に挑む医学」に始まり、「現代の登山」をテーマに、アンセルム・ボー(仏)、柳沢昭夫(日本)、許競(中国)、ナルニ・ジャヤール(インド)、ロバート・シェニ(米

国)氏らが、安全と教育について意見を述べた。

午後六時のセッションIIは「各国の登山事情」について、講師十七人で四時間におたりパネル討議を行なった。ここでは経験豊かな佐々保雄前会長に、チェアマン役の助人を願った。三日間の司会・チェアマンは武田武、田中弘美の二人で務めた。(内容省略)

第三日目の二十二日は、セッションIII「山を次代へ」として、田中邦雄信大教授が「北アルプスの誕生と魅力」を分かりやすく解説し、登山家・重広恒夫氏は、「21世紀の登山」で高峯への挑戦も基本は同じ、とそれぞれ講演が行なわれ、その間には、神恵明会員製作の映画「穂高の四季」も上映された。

シンポジウム最後の記念講演は「自然を語る」のテーマで、西堀栄三郎元会長は、格調高く「自然と離れては、人間は何も出来ない。登山の魅力は、本質的な探究心を満たしてくれること。われわれは自然の恵みに感謝の念をもって、開発も調和を考えて行なうことが大切である」と、山を愛する心で……、とうたい上げられた。

閉会にあたり三日間の報告と話し合いの成果をうけて、「登山は自然の教師である」との松本宣言(別掲)を確認して終了した。

お知らせ電話
234六六五九

八月二十日夜、信濃支部有志主催歓迎会が松本市内の「しづか」で開かれ二十九名が出席した。

八月二十一日夜は大会組織委員会主催レセプションが松本東急インで開かれ、これには百名が出席した。

なお、前文中に載らなかったそれ以外の講師は、(ネパール) クマール・カドカ殿下、テク・ポツカレル、S・R・シャルマ。(パキスタン) アリ・ミルザ、ナジール・ザビル。(中国) 許競。(韓国) 趙相泰、キム・インシク。(日本) 大塚博美、鎌田久、石塚彰。

信濃支部員以外の参加会員は中村テル、山田二郎、橋本清、岡沢祐吉、中村純二、中村あや、松田雄一、神崎忠男、芳野越夫、孫慶錫、新貝勲、近藤等、湯浅道男(順不同)の諸会員です。

なお本大会(会報四九三号参照下さい)につきましては、八月末をもちまして、メインのシンポジウムをはじめ関連行事も、多くの方々の参加を得て盛会裡に終了することが出来ました。これひとえに、ご後援、ご指導を下されました(社)日本山岳会、(社)日本山岳協会、そして今西寿雄本会長はじめ会員各位のみな様のお陰と厚く御礼申し上げます。

また何分にも初めてのため、なにかと行き届かない点も多かったと存じますが、これを尊い教訓と

MATSUMOTO DECLARATION

—The International Alpinists' Symposium—

We declare :

1. that, in the age of mass mountaineering, in order for everybody to enjoy safe mountain climbing with the cooperations of alpinists from the world, mountaineering education with new perspectives be promoted and preventive measures for mountain accidents be reinforced;
2. that, for the new development of the world's mountaineering culture, exchanges and cooperations of mountain climbing organizations across the borders be vitalized. Especially those countries which are involved in scientific research on mountains, improvement of mountaineering technology, and prevention of accidents in an advanced manner are expected to play an important role.
3. that untouched mountain sceneries on the planet of earth be a common treasure of mankind incomparable to others, and that some specific policies be worked out to pass on to the next generation in compliance with the situations of individual countries as well as protection and harmonious utilization of the treasure.
4. that, with this Symposium as a landmark, Nagano Prefecture be the place of exchanges and training for mountaineers of the world since the prefecture possesses the Japan "Alps", which enables us to enjoy various types of mountaineering, as well as different research institutes on mountains. As part of programs of this kind, it is recommended that a general assembly of the UIAA be held in the City of Matsumoto.

August 22, 1986

International Alpinists' Symposium

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

松 本 宣 言

1. 大衆登山時代を迎え、世界の岳人たちが手を結び、楽しく安全な登山をするよう、新たな観点から登山教育を推進し、山岳遭難の防止対策を強化する。
2. 世界の登山文化の新たな発展のため、国境を越えた登山団体などの交流と協力を活発にする。とくに山岳に関する科学的研究、登山技術の向上、事故防止のために、これらのテーマに先進的に取り組んでいる各国の積極的な役割を期待する。
3. 地球上に存在する原始的な山岳景観は、人類共通のかけがえない財産である。保護と調和のある活用をはかりながら、各国の事情に応じて次に残す具体的な施策に取り組む。
4. このシンポジウム開催を機に、変化に富む登山のできる日本アルプスをひかえ、また、山岳研究の諸機関を持つ日本の長野県を世界の岳人たちの訓練、交流の場とするよう望む。この一環として国際山岳連盟(UIAA)総会の松本開催を働きかける。

1986年8月22日

国際アルピニストシンポジウム

して、次の機会を目指して精進に務めて参りたいと存じますので、何率引き続きご指導を賜りますようお願い申し上げます。

なお公式報告書をまとめて結びとたく考えております。
以上感謝の意を表して、ご報告致します。
(文責・田中弘美)

時ならぬ富士の雪

安藤 忠夫

本年四月三十日付け朝刊各紙は、「四十日もの間、富士山の山中で雪を食べて堪え抜いた登山者が助け出された」と報じている。詳しくは、「富士山・須走登山道中腹にある荷物倉庫（標高一、九〇〇）内で男性がぐったりしているのが発見された。その男性は鈴木吉太郎（四九歳）さんで、彼は三月二十日に単独で入山したものの二十三日の大雪で下山できなくなり、倉庫で雪を食べながらじっとしていた」というものだ。

その三月二十三日といえは、三月としては河口湖で、昭和七年の測候所開設以来最高の七五センチもの積雪をみたという大雪が降ったのである。御殿場市内でも歴代四位に当たる二一センチの積雪があったことを伝えている。そして、首都圏では中央線を始めとして、国鉄や私鉄、高速道路や一般道路が各地で寸断され、終日の交通麻痺が生じたことは記憶に新しい。

じつは、私も同じ時期の三月二十三日から二十五日にかけて、ちょうどその大雪に見舞われた吉田

口から富士山の山頂を目指していた。そして、二十四日と二十五日はこのルートで一人の登山者にも出会わなかったのだ、この日は、われわれだけが吉田口ルート上にいたことになる。そこで、当時の河口湖周辺および富士山麓の積雪の様子を記しておく。

私たちが富士山に登るために、豪雨について東名高速道路で名古屋を発ったのは、二十三日の朝方である。途中、ラジオで三島と大井松田の間が降雪のため閉鎖になったことを知って、やむなく富士インターチェンジから富士宮有料道路で富士吉田市へ向かった。すでに私たちはその前日の夜遅く、現地への電話連絡によって相当量の積雪（二十二日二十一時現在で三〇センチ）のあることを知っていた。富士宮市を通過するころより雪に変わり、早速タイヤ・チェーンを巻いて北上したが、朝霧高原では、早くも新雪の吹き溜まりで一

が近くもあった。結局、富士吉田までに都合三回も雪にタイヤを取られたこともあって、午後三時

海外の山

記録主義の時代の終焉

しゅうえん

ギンシュブりなのだ。
しかし、ヒマラヤに記録主義をもちこむ時代は、そろそろ終わったようだ。これからは「いくつめの八千峰登頂」という捉え方には、必要以上に驚かないようにしよう。
無酸素で八千峰をばんばん登ることは、決して並の人間に出来ることではない。よくよく自身を鍛練した、そういう状況作りの出来る、或る意味で恵まれた人達に限られるということを改めて知っておく必要がある。世界の趨勢がそうだから、という議論もあるが、山登りは、オリンピックとは異質のものである。もともと安価でハンディなボンベが工夫されさえすれば、酸素を存分に使った方が自分らしい登り方が出来る人もいるのだ。

メスナーが酸素ボンベつきのヒマラヤを「フエアでない」と言う時、彼がそれを伝えたいのは、自身のライバルに対してだろう。人間は、短い間なら水中に潜ることだってできるが、少しでもゆっくり海の世界を眺めたいのなら、ボンベを背負わなければならない。九千峰に近い山で酸素ボンベの力を借りるのは、そういう道具があるならば卑怯とは言えない。ただ、使わないで済めばもっと素晴らしいというに過ぎないのである。

記録を求めるあまり、どこへ登っても、同じような感慨しかもてない「第一線の登山家」が今後もし生まれるのではないか、という余計な懸念から、こんなことを書いている。メスナーの成し遂げたことは、文句なしに素晴らしい。だが、その「激しさ」を競うあまり、ヒマラヤ、あるいは山登りそのものが本来持っている、自由な広がりが見失われるとしたら、愚かな話だ。メスナー自身ではなく、メスナー的なものの、それは負の側面である。

(江本嘉伸)

を過ぎ、ようやく佐藤茂さん(五合目小屋の経営者)のお宅に着いた。

翌二十四日の早朝、すっかり雪化粧をした浅間神社の境内を抜けて、五合目の佐藤小屋を目指した。前日に下山してきた六人のパーティのトレースを当てにすれば、その日のうちに小屋へ十分に入れるはずだ、とのもくろみである。事実、新雪で大方は消えかかっているとはいえ、歩き始めて数時間はそのトレースを使うことができた。雪が降りだす前に入山した登山者のものであろう、中の茶屋と大石茶屋のほどでフロントガラスまでも、すっぽりと雪に埋まった乗用車やワゴン車が放置されている。この辺りで積雪は一メートルを越えていようか。

馬返しで正午だった。浅間神社から六時間を要したことになる。さらに、二合目で十五時、腰辺りのラッセルとなった。積雪は更に多くなる気配で、もはや明るいうちに五合目へ到達することは望めそうにない。

山の大家と二人だけであったことも手伝って、朝からのラッセルにすっかり疲れ果てていた。夕暮れの十八時を過ぎても三合目でしかない。結局、この日は、目的の佐藤小屋へ達することができず、三合目の廃屋でシュラフ・ザックも、満足な火の気もないままに一晚を過ごした。すでに次第

に深くなる新雪のため、たとえ佐藤小屋へ入ったとしても、森林限界上部での雪崩が心配で、近日中の登頂は無理であることを悟っていた。

そして翌二十五日、前日までの荒天に代わって碧空が広がった。装いも新たに真っ白く着飾った富士山を背に、いさぎよく引返した。富士吉田の街では、臨時休校となった子供たちも総出で、大雪のあとかたづけに追われていた。

それにしても冒頭の一件だが、いったい人間は飲まず食わず、いや、水だけは与えられたとして、どの程度まで生き永らえることができるのだろうか。

長期に涉って食事を採らない事例としては、宗教的、または医学的な理由によって行なわれる断食がある。その宗教的なものとして、世界的には、イスラム教ではイスラム暦の九月に三十日間の断食を行なっていることが有名である。日本でも修験道をはじめとして多く見られ、吾妻鏡の巻二に、文覚上人が鎌倉の江ノ島に参籠(ろう)して三十七日間の断食をして祈願したことが載っている。

近ごろでは、福岡県豊前市の求菩提山(くぼてきさん)で一九八二年四月に七日間(行橋市今井の竜王院住職・山田竜真さん、一九八二年四月四日付け朝日新聞)、一九八三年に十日間(前記同一人・

海外の山

ブロード・ピークとK2の登頂、そしてK2での悲劇

〔編注〕この記録は、K・M・ヘルリヒコフ・アー氏(Prof. Dr. Dr. Med. Habili.)より『山岳』編集委員会宛に送られてきたもので、大森担当理事から会報用にと回されてきたものです。訳は岡沢。』

七月二十五日、金曜日に「ヘルリヒコフ・アーカラコルム遠征隊一九八六」の残りのメンバー六人が、パキスタンから帰国した。遠征隊の構成はヘルリヒコフ・アー(七〇歳)が隊長、ドイツ側はハインリヒ・コッホ(五六歳、副隊長)、トニ・フロイデヒ(二七歳)、マンフレッド・ハインリヒ(四八歳)、ドリス・クスターマン(五四歳)、ヨアヒム・ラビシュ(三四歳)、マルクス・プレヒトル(三五歳)、イレネ・シモン・シュナース博士(三三歳)、

オーストリア側はハンス・ヒルシュビヒレル(二六歳)、ペーテル・ヴェルゲッテル(四五歳)、スイス側はノーマン・ディレーンファース(カメラン、六八歳)、ベダ・フスター(三〇歳)、ディエゴ・ヴェリヒ(二五歳)、ロルフ・ゼンブ(二八歳)、

ポーランド側はイエジ・ククチカ(三八歳)、タデウシ・ピョトロフスキ(四六歳)であった。遠征隊は五月十日にミュンヘンを出発した。十三回登頂に成功し、さらに、イレネ・シモン・シュナース博士は、担当したビタミンEに関する一連の実験で、この重要なビタミンが高所で能力増加に影響するという研究も行なっている。

ベースキャンプは一九八六年六月七日にブロード・ピーク山麓のゴドウィン・オースチン氷河上に建設した。登山は西側から行なわれ、最初に登

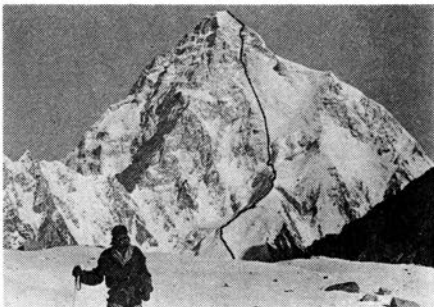
頂した者のルートがとられた。三つの高所キャンプが建てられ、第三キャンプは高度七三〇〇メートルであった。一九八六年六月二十一日、ベダ・フスター、ロルフ・ゼンブ、ディエゴ・ヴェリヒ、ペーテル・ヴェルゲッテル、マルクス・プレヒトルが登頂し、二日後にブロード・ピーク、またの名、ファルチエン・カンリ(八〇四七メートル)をヨアヒム・ラビシュとハインリヒ・コッホが登った。

二週間後の七月七日、トニ・フロイデヒとマンフレッド・ハインリヒがふたたび低いほうの山頂(八〇三〇メートル)を踏んだ。天気は悪化しており、地面には五〇センチの新雪が積っていた。彼らは第三キャンプから登山を始め、その頂上に着くまで十二時間かかった。高所ポーターのカリムがルート作業を続けた。このパーティが頂上に着くまで十八時間を要し、第三キャンプに戻るまでに二十一時間を要した。

一日前の七月五日、ベダ・フスターとロルフ・ゼンブがK2(チョゴリ)山頂にノーマル・ルート(アブルツツイ稜)から登った。

K2(八六一一メートル)の登山許可はサウス・スパールのAまたはBからで、われわれはクラックのある氷のところまでルートを左にとったが、このルートはクラックのある氷のところから左(西方向)に進み、

直接、鎌氷河へ入るディレツティシマに



K2の南面と登山ルート

一九八六年九月十日付け毎日新聞。また一九八三年十一月に天台宗総本山延暦寺で七日間(飯室谷長寿院の大阿闍梨人だいいじゃりV・酒井雄哉さん、一九八三年十一月二十四日付け朝日新聞)の断食が行なわれている。(なお、かつてこの断食行入即身成仏Vは、二十一日間のものがあつたようだが普通は読経しながら死に至つたといわれる)

しかし、件の遭難は、寝具をかぶっていたとはいえ、夜は氷点下一〇度近くまで下がる山中のこと。そんな場所ですら四十日の長期にわたって堪えられたということは、やはり驚異に値する。勿論、今回の行動を一概に肯定できない(むしろ疑問点の方が多い)が、こと遭難という事態に至ったときは、これまでもしばしば指摘されてきたように、無駄なエネルギーを使うことなく、じつと堪えることこそが、自らの命を永らえる最大の方途であるとの教訓をあらためて得た。

「木暮文庫」

始末記

小野 幸

会報八月号に望月さんが木暮文庫について記されており、木暮先生がなくなりました。先生がなくなれば、戦争がはげ

しくなりましたので、木暮家でも疎開を考えられ、おつとめだった都庁に本の相談をされたのです。一番かさばるものは本でした。疎開先まで持っていくことはできないとのこと、先生の本は地誌と歴史、それに山岳関係のもので、先生のお宅を訪ねた方は、玄関に入るや目前に大きな本箱にぎっしりつまっている本、たたみや床がぬけるのではないかとおどろかされたでしょう。

結論として都では和書を引取ることとし、山岳関係は日本山岳会へとまわりました。都では本の定価どおりで買上げることになりました。この頃の古本はとても安かったのですが、遺族の方のことも考えてのことでした。そして、山の本(洋書)は会に寄贈となったのです。学校山岳部や山岳会の報告書類はその数年前に会に寄贈されております。それがすべて焼失してしまつたのですが、都に購入されたものは今でも利用されております。

後日ばなしがあります。その後、昭和二十四、五年ごろでしたか、未亡人から洋書が二冊出てきましたので会に寄贈したいとお知らせがありました。参上できない中に先生の七回忌にルーム(お茶の水)で有志があつたり「木暮理太郎氏を偲ぶ会」を開くことになりましたので、お持参願うようにしたので、それが Sea of the Ry-

海外の山

なるところだ。

二人のポーランド人、タデウシ(テディ)・ピョトロフスキとイエジ・ククチカは六月半ばに初めからK2に挑み、半分まで登った。彼らはトニ・フロイデヒと高所ボーターのカリムに第二キャンプ(六五〇〇)まで支援を受けた。第二回目のアタックでは鎌氷河の端にある岩塔まで達したが、悪天候のため断念した。最後は七月六日、東面を殆ど登りきって、降雪でガスっていたK2山頂まであと二三メートルまでのところに達した。七月八日、彼らは山頂に着いた。テントをクローワールに残してきたため、彼らはアブルツツイ稜を下るとき八三〇〇と七七〇〇のところで二回ビグアークしなければならなかった。二人の登山家は韓国隊が建てた第三キャンプのテントが良く見えるところまでやつと近づいた。高度七三五四でテディ・ピョトロフスキはすつか

ポーランド山岳会よりお礼状

日本山岳会会長 今西寿雄殿
拝啓 一九八六年五月から六月にかけての我がポーランド登山家達の初めての訪日に際し、素晴らしい歓待を受けましたことに心から御礼を申し上げます。

私達のチームは皆様方のおもてなしと日本の比類ない美しさに、すっかり心を奪われてしまいました。

また、私達は滞日中に多くの日本の登山家達と友人になりました。そしてこの両者の深い関係は、将来の合同登山を可能ならしめるものと期待いたしております。

さて、今度は私達が皆様のポーランド訪問をお待ちする番です。私達が受けました皆様方の暖いおもてなしに対し、私達は、ポーランド風にお返

り消耗し、両方のシニタイクアイゼンをなくし、二〇〇〇で墜落して死んだ。このときの天候は非常に悪く、したがって眺望もきかなかった。ククチカはこれのため友のアキシデントに気づかなかった。テディ・ピョトロフスキの遺体はまだ見つかっていない。この事故は七月十日に起きていた。消耗し、助けもいままククチカはやつと備えの行き届いている韓国隊の第三キャンプにたどり着き、少しばかり緊張をほぐし、二十四時間眠りつづけた。七月十一日、消耗していたポーランドの登山家は韓国人に発見され、二日ばかりでベリオンファイサー、アンワール大尉の間で交した取り決めは、ククチカをヘリコプターでスカルドへ連れ戻すというものであった。

しをしたいと存じております。

ポーランド訪問をご考慮戴けるなら、可能な人数、年令並びに興味、来訪日等を書面にてお知らせ下さるようお願い申し上げます。

私達の若いクライマー達は、殊の他、日本でのフリー・クライミングに興奮さめやらぬものがあります。もしかしして、四人から六人くらいの小人数のグループを岩登りの目的のみに、再度訪日することが、出来まうでしょうか、お伺い申し上げます。

私達をお世話して下さいました日本山岳会の皆様方に、私達の御礼の言葉をお伝え下さい。

私達双方の接触が益々盛んになり、将来、このような会合が屢々、催されることを希望いたしております。

一九八六年七月二十八日

ポーランド山岳会会長

アンジェイ・パシコフスキ

敬具

海外の山

ins of desert Cathey. 2 V.、であり、これだけは今でも会に残されており、その「偲ぶ会」は昭和・東西南北・

第十回丹水会の記

近藤 信行

和二十五年五月六日でした。

春と秋、丹沢の沢登りを楽しもうというこの会は、六月七日、第十回目をむかえた。大山麓の宿坊・東学荘にあつまつたのは四十四名、いつもながら和やかな雰囲気の話合いがつづいた。参加者全員に「丹水通信」第五号、前回の講演記録である宇山幸治氏の「丹沢回顧」、および第十回記念のテレフォンカード（故折井健一氏の題字、石川治郎氏作「尊仏小屋」の絵入り）がくばられたが、こんな奥ゆかしい配慮は、丹水会ならではのものではあらう。

この夜の記念講演は、丹沢の天狗さんとの異名をとる栄光学園のハンス・シュトルテ先生。一九一三年、ドレスデン生まれの先生は、三四年（昭和九年）の来日以来、神戸の六甲中学で教鞭をとり、東京・広島で神学を修められた方で、丹沢の山と沢には昭和十二年から親しんできたという。この夜約四十分、その五十年におよぶ経験をふまえて、丹沢の自然と歴史、山で出会った人や動物についてお話し下さったが、流暢な日

本語とユーモアたっぷりの表現で、会場からは笑いが渦をまいた。丹水会の法被を贈られた先生は、それ着ていかにも楽しそうであった。この講演は次回までに、古谷聖司君によって小冊子にまとめられる予定である。

この会は発足してまだわずか六年だが、回を重ねるごとに和気藹藹と盛んになってきたのは、たいへんよろこばしいことである。運営にあたる古谷聖司君の尽力に負うところが大きい。第十回を記念して、古谷君に感謝をこめて記念品を贈った。

さて翌日は大山川湖行である。ケーブルの下社駅から中腹を捲いて沢にとりつく。小滝の連続あり廊下状の岩場ありというぐあい、快適な沢登りであった。二段の滝の下部や最後のハメートの滝ではザイルを出したが、老若男女二十九名が続々と登るというのだから、ちょっと壮観である。二俣からは右手をとっていくつかの涸棚を登り、ガレをつめて、全員が大山の頂上に達したのは、午後

海外の山

訪日隊々長

アンジェイ・ザヴァダ

ニュージーランド山岳会より来信

日本山岳会会長 今西寿雄殿

「一九八七年三月一日より三月十五日まで、マウント・クック国際キャンプ開催の件」

拝啓 ニュージーランド山岳会は標記の日時に国際キャンプを開催いたします。つきましては、この催しに貴山岳会からチームをお送り下さるようお願い申し上げます。

このキャンプにニュージーランドの登山家の参加は勿論のこと、ソ連から四人のチームの参加が

決っております。

私は十月に開かれるミュンヘンでの国際山岳連盟総会に出席し、このキャンプへの参加を各国に呼びかける積りでおります。

参加チームは、旅費、食糧、装備は各自負担となりますが、ニュージーランド山岳会の山小屋や高所の小屋は無料で使うことが出来ます。

私はノーマン・ハーディとこの件に関し、討議いたしました。彼が訪日の際、このキャンプ開催についてお話しすることと思います。

ニュージーランド山岳会会長

リチャード・ピアソン

※前記二件についての応募要領は「お知らせ」欄に掲載してあります。

海外委員会

図書

紹介



山の本三冊

『山のアルバム』

北アルプス回想

田淵 行男著

このアルバムは、第二次大戦をはさむ十年間に、田淵

さん自身の手で作成されたものである。いまや古典ともいえる『山岳写真傑作集』も、こうした一連のアルバムの中から抜粋された作品だったという。

往年の鹿島槍や穂高岳の写真とともに、著者自身の若い日の雄姿も見える。随所に散りばめられたスタンプは、当時の山小屋のそれに加えて、著者の創作になるものも多い。出版に当たっては、写真の変色を補うために三色刷の方法がとられているが、モノクロならではの余韻が郷愁をそそる。

そこには山が山であり、山村が山村であった時代が再現されていて、同じころ安曇野で暮らした私には感慨ふかいものがある。まし

『尾瀬』

新井幸人撮影

串田孫一文

美しい尾瀬の写真集である。春匂う、夏光る、花競う、秋煙る、冬舞う、とうたった串田さんの文章が、四季折々の尾瀬を讃美してやまない。生命感みなぎる尾瀬、あでやかな尾瀬、モノトーンに近い静寂な尾瀬――

ひたすら尾瀬を追い続ける撮影者は一九五三年群馬県生まれの

二時半であった。

東京に近くて、存分に沢登りの楽しめる丹沢。また会いましょうと言って、それぞれに尾根道を下って行った。次回は西丹沢・箒沢山の家に集まる予定である。

参加者 荒野康子、泉久恵、稲葉十四男、榎本進、大森薫雄、大森久雄、小川雅雄、大峰芳枝、大西昌子、奥野幸道、川上光久、神原忠夫、狩野芳郎、川合周、北島憲之、北原正宣、黒滝泰男、近藤信行、斎藤貞雄、重村清、H・シュトルテ、鈴木正俊、関塚貞亨、滝沢芳章、田中千穂子、島居亮、徳地信行、奈良洋子、藤江幾太郎、細井澄子、松家晋、三栖寿生、三好まき子、宮川富三雄、村上賢二、山崎健、山本正基、山内純子、山本美津子、山田靖子、渡辺恒美、渡辺玉枝(五十音順)

三水会現地集會

上高地山研で

アンコロモチと

薬湯の集い

九月十三日、三水会現地集會が、上高地山研に十八人の会員の参加を得て行なわれた。

七時三十分新宿発のアルプス一号に乗車した本隊一行は、十一時ちよっと前に松本に到着し、すぐに岩堀さんの総指揮で、こんなにもと思うほど大量の食糧を購入してタクシード上高地入り、十四時

三十分、山研に到着した。

高曇りだが穂高の稜線の見えるまあまあの天候で、カップ橋のあたり結構人も多い。まずは無事に到着を祝ってビールで乾盃し、夕刻までの間、山研周辺の植物の説明を片岡さんから伺ったりして、思い思いに時を過ごした。

他の方法で来られた方たちも次々と山研入りし、十七時より主題の「アンコロモチと薬湯の集い」が開始された。大長老、長老……と居並ぶ中に、岩堀さん、管理人さんの大奮闘の数々のご馳走と、薬湯と云う名前に替わったビール、ウイスキー、日本酒、焼酎が立ち並び、第一次から始まった乾盃が、二次、三次……と続いて、熱気の溢れる室内は、折りから降りだした外の冷気と対照的に、歓談と笑声が深更まで絶えなかった。

九月十四日、昨夜の薬湯の効き目か、アンコロモチの故か、皆さん大変良い顔色で一階広間に集まり朝食、食欲も誠に旺盛だ。今日は上高地を散策して帰る組、長瀬、鹿島槍に向う組(早朝に出発した)或いは焼岳、西穂などと計画もまちまちなので、朝食後散會して、三三五五、それぞれの目的地に向った。曇りで時々小雨の降る芳ばしくない天候も、出発後急速に好転し、どのグループもすばらしい秋の一日を楽しんだことと思う。

新進紹介

『山稜玻璃』

三宅 修撮影
串田孫一文

玻璃とは水晶のこと。題名の通り収録された写真は、岩も雪も水も、時には花や雲までも、さながら玻璃の如くにかがやいている。三宅さんとはその学生時代から親しい串田さんが、詩「山の旋律」のほか春夏秋冬の文章を寄せている。

『尾瀬』は一九八五年五月、『山稜玻璃』は十一月、時事通信社刊。一〇〇ページ 定価三八〇〇円、三九〇〇円 (蜂谷 緑)

高みをめざして

ラインホルト・メスナーの素顔

ロナルド・フォークス著

新島義昭訳

ロンドン・タイムズという著名日刊紙の記者によってメスナー像が浮彫りにされたというニュースは、日本のようなタテ型社会に在るものには強い影響を与える。

一九八二年にメスナーはミュンヘンのヘルビッヒ社から『全てわが山々』という自叙伝風の写真集を出しているが、『ハイ・アンビション(高みをめざして)』の著者、フォークスは、並行して作られていたこの本の編集に間接的にかかわっていたとも考えられる。

『高みをめざして』の殆どは、これまでメスナーが書いた本の叙述に基いているが、一九七八年のペーター・ハーベラーと登ったエヴェレストやフィリネスにおけるメスナーの生活については、フォークス記者の実際に目にしたことが基となっているようである。直接質問して書いた部分は、フォークスがドイツ語のわかるメスナー周辺の人を介したためか、内容はメスナー寄りの記述になっているようだ。この本で些細なこと、煩わしいことと片付けられているヘルリヒコツファー博士やビッターリングとの訴訟問題も、ミュンヘン地方裁判所での判決、となつていゝ。実際はミュンヘンにあるバイエルン州の上級地方裁判所(日本なら高裁、共和国制の西ドイツならバイエルン州最高裁)でのできごと。これではメスナーは真実を知らない人に先手先手と働きかける商売人、といった印象さえ与えかねない。著者が真実を伝えるべきタイムズの記者であるだけに残念だ。

現在のメスナーはドイツ語圏にある山岳会の殆どを敵にまわしている観さえあるのだが、前掲『全てわが山々』の、家族と撮った幼

いラインホルト・メスナーの写真や、二十歳前後の模範的登山家といわれたころの、山で撮ったメスナーの写真などからは、今のメスナーの姿を想像することはとてもできない。

この本の二九二ページに、メスナーの秘書役のニーナが、メスナーは若い才能のあるクライマーを個人負担なしで遠征に招待している、といった点に触れているところがある。彼女はそこで、招待を受けた若者が公の発言を自由に認めてもらえないといつてメスナーを非難することがあるが、それは自分で自分の墓穴を掘るようなものだ、と言っている。

ナンガ・パルバートをめぐるヘルリヒコツファー博士らとの訴訟も、そのきっかけはメスナーが、まとめ役のヘルリヒコツファー博士に断りなく公に発言したからではなかったのか。

スポーツ・クライミングといった岩登りが急速に若者のあいだに広がり出した今、八千八百峰すべてに登っても、なお、過去の人になりつつある自分を、財を成したメスナーは今後どのように処してゆくのであろうか。

一九八五年八月、白水社刊、二九八ページ、定価 一九〇〇円

(岡沢祐吉)

圖書紹介

参加者 秋山光平、伊藤信夫、岩堀瑞子、内山誠、小野利次、片岡博、川上光久、久保孝一郎、坂倉登喜子、齊藤直信、重村清、高田眞哉、千葉保之、遠田栄、沼倉寛二郎、広羽清、山口一孝、横溝修一
(横溝修一)

山岳博物館を考える

夏休み中に新たに全面的に整理、ラベルをつけた絵画をはじめ登山用具、山頂の石などのリストも完成。会に図った後なるべく早く松本と大町の山岳博物館に送る用意をした。当分の間これらの品を両館にあずけ管理、展示などおねがいする。それにしても自前の博物館があったらもっともと熱が入るのというのが皆の意見だった。次回は十月二十二日(木)。

●報告●

蝦夷お月見会

北海道支部

北海道支部の「お月見の会」は回を重ね十五回となる。今年は、九月二十日、函館郊外大沼国定公園内の別荘を拝借し観月会処とした。

大沼国定公園は、幸田露伴編『掌中山水』の蝦夷紀行で、「内浦岳は駒ヶ嶽といふ焼山なり」と記してある、駒ヶ岳噴火によりで

九月出席者 坂倉登喜子、中村純二、平柳一郎、梅野淑子
(梅野淑子)

会報記事修正

会報49号(八月号)七ページ、別表1

1行目	仮番	備品番号
5行目	272	↓ 367
13行目	403	↓ 477
17行目	324	↓ (全行削除)
18行目	333	↓ 328
20行目	334	↓ 330
24行目	335	↓ 329
12行目	戦後特製↓大正末期特製	芳野幹一氏旧蔵

小田稔氏文化功労者に

年次晩餐会によくご夫婦で出席されている小田稔氏が、このたび文化功労者に選ばれました。

きた、大沼、小沼、蕁菜沼の三湖、湖上に浮ぶ百二十六の島々を前景とした、山と湖の調和した美事な風景を作り出している所。駒ヶ岳の噴火は、寛永十七年以來大噴火六度、その他、小噴火は、数十回繰返されているが、昭和十七年の小噴火以降は、全く沈黙を保っている。

さて、今夜の月見の宴は、十七夜、立待月を見ることになる。この地の開拓の祖、池田醇氏に由来する池田園駅、函館本線砂原線廻りのこの駅は、昭和二十年六月一

日開駅だが、その駅前の別荘地の素晴らしい環境の中で、先着組は、温泉へ、そして月の出も待たずビールで乾杯の組もある。

午後六時、橋本支部長、佐々前会長ご夫妻を含め、十五名が集う。

樽生ビールを樽ごと持込み豪華な酒宴となる。別荘の前に出ると月が雲間より出て、皓々と訝え渡り薄がゆれる。夜更けとともに、焚火が檜桜材の薪なので、火勢が上る。それとともにメートルも上り、ジョニ黒、にぎり酒、さらに美味いおでん、咬嚼吧薯、唐黍、枝豆、秋茄子炒、鳥賊の塩辛、胡瓜、紫蘇、キャベツの新漬等、盛沢山のメニューが次々と貧慾な胃袋に消えて行く。

次は、ハーモニカに合せ、北海道支部合唱団の妙なる調べは、夜空に、大沼湖畔に響く。

翌朝、小雨。朝食は練蕎麦、天麩羅蕎麦。支部山行袴腰岳(一、一〇八・三三三)登山のため山麓の七飯町に向う。しかし、雨は、やや激しくなり、河村会員宅で待機する。

九月十三日、上明神岳の現成周氷河現象をみながら霧の中を彷徨、宿は岩泉町の大川長崎屋で、一等三角点東根山登頂の望月達夫氏らと合流。

小止みなく雨は降り降り、温泉巡りや、ライフワークの取材は人数が減り、逆にスコッチに群る墮落会員の集りとなる。

九月十四日、堺ノ神山を、岩泉町川崎林道側と、新里村、和井内牧野側から交叉登頂、下り道、豪雨、北上山地ではナンバーワンの樺の美林をゆくり見る間もなく下山、オレンジ色のマツ茸の収穫多。

現地函館の河村、桜井の両ご夫妻と横田会員には、別荘の借用下見、おでんの仕込み、食べ物飲み物の手配、と至れり尽くせりで、

九月十五日、岩泉町、釜津田の高倉山の二等三角点へ登頂、また差入れのトウモロコシと銘酒岩手

例会報告

岩手支部

講演会

六月十三日夜、盛岡市シルクロード・チャイナにて、西川一三氏の「チベット今昔」について講演会開催。協力 和田庄司・宮伸徳・二上純也・佐藤敏彦。

九月に入っても残暑なおきびしき昨日今日、といっても、山岳会の夏はビア・パーティーで終るといわれている。

婦人懇談会

ビア・パーティー

川に連夜、舌つづみをうったのはいうまでもない。

参加者 望月達夫、浅野孝一以上東京地区。浅野新一、田鎖寿、石村実、菊地修身、近藤有慶・夫人、山崎成一・夫人、和田庄司、松田和弘、鹿野松男、須々田秀美、門田房男、佐藤紀子、佐藤敏彦 他一名。(佐藤敏彦)

佐藤知恵子婦懇委員長が「この激しい雨の中を、出席して下さった皆様は山岳会の優良メンバーです」とユーモアたっぷりに開会の言葉を述べ、乾杯の音頭は婦懇の大先輩・今井喜美子女史が、「女性会員を代表し、今後とも婦懇をよろしく」と挨拶され、一杯目のビールが飲みほされた。しばしの歓談が続く、途中、お土産持参の方々や差し入れをして下さった方々のお名前が披露され、また、今

日の裏方である婦懇のメンバーの紹介もあつて、ビールを口元に運ぶ手が止まったのはその時だけであつた。山の思い出や計画など、それぞれになごやかな語らいはつきず、梅野淑子婦懇理事の挨拶で閉会となつたのは九時頃であつた。

会員同志の交流の場として、忘年会ともども、より多くの方々の参加で盛り上げて頂けたらと願っている。

今夏のビア・パーティも無事終了。秋の気配が急に身近に感じられるようになった。

△参加者数、六十七名▽
(門井照子)

・会務報告

九月理事会

9月10日午後6時30分

場所・本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副会長、嶋原、橋本、大橋、浜口、梅野、高遠、鈴木、太田、新井、岡沢、平井、長谷川、関塚各理事
山本監事、松田、宮下、中村各評議員

委任 松永、大森各理事

審議事項

◎事務職員後任の件

適当な人が決まるまでのピンチヒッターとして、早大OB、日本山岳会会員児玉茂氏に十月一日より勤務してもらう

承認

◎ナムチェバルワ登山の件

中国に以前より申請していたところ、最近日本ヒマラヤ協会と中国登山協会の合同で登山するとの発表があつたので、中国側に抗議の申し入れをするともに、政治ルートを通じて善処されるよう依頼する 承認

報告事項

◎三合同登山の経過

◎定款変更認可となつたので、六十二年度より新定款に基づく会費値上げが行なわれる

◎日本山岳会九州の集い86みやざきについて

◎会員証は年次晩餐会の案内と一緒に配布の予定

◎国際アルピニスト大会シンポジウムについて

◎近代絵画にみる日本の山・名作展について

◎各委員会報告

◎年次晩餐会、十二月六日(土)私学会館富士の間

・ルーム日誌

九月

2日(火) 海外委

6日(土) ビア・パーティ

9日(火) 常務理事会

10日(水) 理事会

16日(火) 婦人懇、会員懇談会(スライド上映)

18日(木) 図書委、博物館を考える会

24日(水) 年次晩餐会準備委員会

25日(木) 会報委、婦人懇談会
26日(金) 科学研究委
30日(火) 自然保護委
今月の来室者312名

会員移動

物故

7411 猪俣 信市(8・22)

1279 山本吉之助(9・13)

終身会員 神原 忠夫

5975 支部変更

4088 廣瀬幸治 関西支部へ

5955 石原 謙

6829 岩垣敏宏

7327 茶谷徳行

8287 古田修司

8300 重松保宏

8398 藤村哲也

8462 増岡栄一

8542 大野幸雄

8573 岡田 隆

8961 岡部庸子

8969 藤井良治

9391 坂田興一

9538 前田 芳



加納一郎著作集

探検ジャーナリストの先駆者であり、極地研究や探検史の翻訳、啓蒙に、あるいは雪氷学研究などで知られる加納一郎氏。生涯をかけておこなわれた反骨と情熱の著作活動から選んだ精粹の全5巻刊行!

編集委員

西堀栄三郎(代表)

北村泰一

堂本暁子

樋口敬二

本多勝一

推薦者

今井通子

今西錦司

桑原武夫

田 英夫

堀江謙一

村山雅美

1 極地の探検

定価四、二〇〇円

2 フラム号漂流記

定価三、六〇〇円

3 北海道の山と雪

定価三、八〇〇円

4 自然のなかで

定価三、八〇〇円

5 世界最悪の旅

定価四、六〇〇円

A5判型／丸背表紙・豪華箱入り

教育社

発行所 株式会社 教育社
販売 教育社出版サービス株式会社
〒102 東京都千代田区富士見2-11-10 丸十ビル
電話 03(264)5477(代)

図書受入報告

図書委員会

昭和61年2月分受入図書

1. 青木保著「御岳巡礼」筑摩書房 1985 (筑摩書房藤本由香里氏寄贈)
2. ロナルド・フォークス著「高みをめざして ラインホルト・メスナーの素顔」白水社 1985 (版元寄贈)
3. 山本武人著「近代湖北の山」ナカニシヤ出版 1985 (版元寄贈)
4. 岡田敏夫著「上州武尊山 奥利根の秘峰」東京新聞出版局 1985 (版元寄贈)
5. 成瀬岩雄著「山と峠と氷河」茗溪堂 1986 (成瀬和子氏寄贈)
6. 新井幸人(撮影)「尾瀬」時事通信社 1985 (版元寄贈)
7. 三宅修(撮影)「山稜玻璃」時事通信社 1985 (版元寄贈)
8. 松本保彦編「溪流フィッシング '86 別冊山と溪谷」山と溪谷社 1986 (版元寄贈)
9. 田淵行男編「山のアルバム 北アルプス回想」講談社 1985 (版元寄贈)
10. "Glaciers in China" Shanghai Scientific and Technical Pub. 1980 (加藤康一郎氏寄贈)
11. Heckel, Vilem "Als Bergsteiger im Kaukasus" Svět-Sovětú 1968 (加藤康一郎氏寄贈)
12. Hamilton, F.B. "An account of the Kingdom of Nepal" Manjusri 1971 (加藤康一郎氏寄贈)
13. Herrligkoffer "Kampf und Sieg am Nanga Parbat" Spectrum 1971 (加藤康一郎氏寄贈)
14. Olschak "Bhutan" Stein and Day 1971 (加藤康一郎氏寄贈)
15. 平賀文男著「中央アルプスと御岳」大村書店 昭和12 (購入)
16. 葉師義美著「遥かなるヒマラヤ」あかね書房 1969 (購入)
17. パウル・パウアー著「カンチェンジュンガをめざして」実業之日本社 昭和31 (購入)
18. チャールス・エヴァンス著「カンチェンジュンガ その成功の記録」朝日新聞社 昭和22 (購入)
19. ガストン・レビュファ著「美しきモン・ブラン山群」新潮社 昭和44 (購入)
20. ガストン・レビュファ著「美しきマッターホルン」新潮社 昭和42 (購入)
21. ガストン・レビュファ著「氷・雪・岩」新潮社 昭和47 (購入)
22. 上條武著「孤高の道しるべ」銀河書房 昭和58 (購入)
23. レオナルド・ウィバリー著「エヴェレストの歴史」平凡社 昭和21 (購入)
24. ジョン・ハント著「エヴェレスト登頂」朝日新聞社 昭和29 (購入)
25. 奥利根山岳会「利根川水源紀行」煥呼堂 昭和55 (購入)
26. 小沢重男著「素顔のモンゴル」芙蓉書房 昭和45 (購入)
27. 同志社大学山岳会 アンデス・アマゾン登山隊「ヴィルカバルパ山群とウルバルバ河」同志社大学山岳会 1969 (購入)
29. リック・リッジウェイ著「ちょっとエベレストまで」講談社 1980 (購入)
29. テンジン著「テンジンによるエヴェレスト征服」新潮社 昭和29 (購入)
30. 小方全弘著「ブータン感傷旅行」茗溪堂 昭和47 (購入)
31. 加納一郎著「氷雪圏の記録」山と溪谷社 昭和22 (購入)
32. 杉高久著「谷川岳物語」山と溪谷社 1959 (購入)
33. マウント・エバンス著「南極へいどむ」朋文堂 昭和31 (購入)
34. 平林克敏著「ヒマラヤサイバル登頂」サンケイ新聞出版局 昭和39 (購入)
35. 石坂昭二郎著「ヒマルチュリ日記」ベースボールマガジン社 昭和34 (購入)
36. 愛知学院大学学士山岳会「岳士 1号」愛知学院大学学士山岳会 昭和55 (購入)
37. ジョン, D. マッカラム著「エヴェレスト日記」二見書房 昭和42 (購入)

(以下次号)

栄光の時代を語り継ぐ幻の名書
遂に邦訳。

スイス山岳研究財団編
**MOUNTAIN
WORLD**
マウンテン・ワールド
総19巻(本巻17巻・別巻2巻)
小学館

第1期7冊セットご予約の方にもれなく
大森弘一郎撮影「エヴェレスト(サガルマタ)遠望」の
オリジナルプリント(169^{mm}×414^{mm})を
差し上げます。

15巻〜17巻(1964〜1969)
別巻ヒマラヤ編年誌I・ヒマラヤ編年誌II
全5巻/昭和62年秋刊行予定
全7巻/昭和63年秋刊行予定

第II期

第III期

●支払期間10か月 支払回数10回 ●実質年率8.5% (均等支払の場合) ●前払金1000円
B5判257^{mm}×182^{mm} / 平均頁310頁 / 平均写真頁64頁
日本語版監修委員・近藤 等(早稲田大学教授)
福田宏年(中央大学教授) 望月達夫(日本山岳会名誉会長)
葉師義美(京都大学大学院教授) 吉沢一郎(前日本山岳会副会長)
翻訳・田村協子/佐藤テル/山本健一郎 倉知敬(新潟義昭/吉永定雄ほか)

●第1期7冊セット価格/現金価格(定価)175,000円
分割払価格 182,000円

8巻〜14巻(1953〜1963)
全7巻 昭和62年1月刊行予定

第1期/予約受付中!

世界の主な高峰が次々に登頂された栄光の時代、
そのすべてを語り継ぐ「マウンテン・ワールド」。

来年1月、いよいよ刊行です。詳細な記録、貴重な写真の数々。
「幻の名書」の復活に、どうぞご期待ください。

輝く時代の、熱き記録。

詳しい資料を差し上げます。〒101 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館宣伝部「マウンテン・ワールド」係までおハガキで。



☎ 234-6659

この電話で
お知らせ
しています

◎忘年会の お知らせ

日時 十二月十三日(土)

十八時三十分より

場所 山岳会ルーム

会費 二、〇〇〇円

(楽しい福引きがあります)

集委員会・婦人懇談会

共催

*

◎訪ポーランド隊員並に 訪ニュージーランド隊 員募集の件

五ページ掲載の通りポーランド
山岳会々長、並にニュージーラン
ド山岳会々長の招聘により左記の
ように隊員を募集いたします。

①訪ポーランド隊

隊長 山田二郎副会長

隊員 約六名

場所 ポーランド、タトラ山群

日程 一九八七年三月頃、約二

週間、現地参加、或いは

現地解散自由

費用 往復旅費、約十八万円並
びに参加費八万円

②ニュージーランド国際アルピニスト
大会参加日本隊

隊長 隊員より互選

隊員 四名(活動的な登山を要
求されています)

場所 ニュージーランド、マウ
ント・クック

日程 一九八七年三月一日より
三月十五日まで

費用 クライスト・チャーチ、
オークランド経由、マウ
ント・クックまでの往復
旅費、到着日、帰国前日
のホテル代を含めて約三
十二万円

便宜上、海外委員会が窓口業務
を致します。申し込み、お問い合
せは、海外委、或いは、本会事務
局までお願いいたします。

(海外委員会)

「新会員証発行が遅れていますが、
現在準備をすすめておりますので
ご了承ください。総務担当理事」

昭和六十一年十一月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビュウハイム四番町

社団法人 日本山岳会

発行者 今西 寿雄

編集代表 岡 祐吉

電話東京(2線) 四四三三

振替口座 東京三〇八二九番

東京都港区六本木三ノノ三〇

ABビル

印刷所 株式会社 技報堂